

アイヌ神謡集

しん ようしゅう

「銀の滴降る降るまはりに…」の書き出しで有名な『アイヌ神謡集』は、登別出身の知里幸恵が、アイヌ民族に伝承されていたカムイユカラをアイヌ語（ローマ字で表記）と日本語との対訳形式で書き表したものです。本文は13の神話で構成されています。

其の昔此の廣い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚兒の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活してゐた彼等は、眞に自然の寵兒、何と云ふ幸福な人だちであつたでせう。

冬の陸には林野をおほふ深雪を蹴つて、天地を凍らす寒氣を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を釣り、花咲く春は軟かな陽の光を浴びて、永久に囀つる小鳥と共に歌ひ暮して落とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃ふすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、圓かな月に夢を結ぶ。

嗚呼何といふ楽しい生活でせう……

―アイヌ神謡集の序から―



知里幸恵編『アイヌ神謡集』
(郷土研究所発行)



よこやま 横山むつみさん

ちりしんしゃ 知里森舎代表・知里幸恵の姪

ヌプルペツへ、登別へ

知里幸恵は、今から100年前にこの登別に生まれました。彼女が生前に著した『アイヌ神謡集』は、今も人びとに読み続けられ、読む者の心に深い感銘を与えています。それは、序文の和文の美しさによるといわれています。私は幸恵の姪であることとアイヌであるということから、この序文の中身をそのままに受け入れることができま

す。アイヌ以外の人びとがこの文章を深く読むことがあるならば、きつと深刻な思いになるはずでしょうに、すばらしいと感嘆するのは、ペンの力なのかと思えます。アイヌの悲惨な状況を吐露しながらも、圧迫した人々を徹底的に追及することはせず、反省を促すような配慮をしているからでしょう。

「登別の春はどんなにきれいでせう。登別の春の海はどんなにのどかでせう。春雨のソポソポと降るその景色もどんなに美しいでせう。うららかな春の日を浴びながら遊んでいる高央の面影を胸に浮かべて、どんなに大きくなつたかと思ふてなつかしくてたまらないので御座います。景色のいゝあの小学校の校庭で元氣よく飛びまわつてゐる真志保のすがたも目に浮びます。……私は海が懐かしくてなりません。」（大正7年5月）

幸恵の残したもののから、その人生をたどつてみると、『アイヌ神謡集』が生まれる道筋が見えてきます。アイヌ語の中で育つた幸恵、日本語が身についた幸恵だからこそできたこと。幸恵の時代には危機的状況にあつたアイヌ語を、何とかして未来に伝えたいと考えたときに、手段としてあつたのは書きとめることでした。アイヌで初めてアイヌのカムイユカラ（神謡）を記述して著した幸恵。この偉業をなした幸恵のことを誇りに思い世に知らしたい。今年のイベントは、生誕地登別だからこそふさわしい、幸恵の記念館建設につなげる意義のあるものにしたいたいと思っています。